
苦い思い出。いや、苦痛な思い出!?

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苦い思い出。いや、苦痛な思い出！？

【Zマーク】

Z4885M

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

署長の娘、高杉聖歌の

苦く、甘い思い出。

ある意味苦痛な思い出の一
部始終をご覧下さい

1 恋―恋―恋―！

私は署長の一人娘。高杉聖歌。

あつ、皆さんには「いつ行った方がいいかしら。

田畠警部や、高木刑事、佐藤刑事などの刑事さん達がいる警察署。の署長のむすめです。これは、ある日の私の話――恋物語。どうぞお聞きください。

「あつ聖歌さん。こんにちわ。」

「こにちわ、佐藤さん。」

警視庁の中ではアイドル的存在の佐藤さん。女の私でも惚れ惚れしてしまつほど、憧れ的存在。

「こんにちわ、聖歌さん。」

「こんにちわ、高木さん。」

高木刑事は、佐藤さんと恋仲という仲。いつか私もそんな人が現れるだろうか。

その時。

「犯人は、この人です！」

「そうか！助かつたよ工藤君。また君の力を借りてしまつたな。」

「いいえ、また困ったときはこの工藤新一をお呼びください。」

つと聞こえた。

「おおー・聖歌さん。」

「「」さんたちわ。田暮警部。」

「田暮警部。「」の人は・・・?」

「あつ工藤君。君はまだ、見てなかつたね。紹介するよ、署長の娘。聖歌さんだよ。」

男の人はとても綺麗な顔立ちで、私は一瞬できになつてしまつた。
これを一田ぼれ。といつのだらつか。

「初めまして。工藤新一です。」

「初めまして。聖歌です。聖歌つて呼んで下さい、新一つて呼んで
もいいかな?。」

「じめん。わけあつて、それはできないんだ。聖歌さん。」

「そうか。じめんね、工藤君。」

「いいや、俺「」じめん。」

「あひ、工藤君。浮氣かしりへ言こつせやつわよ。」

え？ 浮氣！？

「い、いや…………そんなつ…………」

バッターン！

「工藤君！」

「工藤君！」

工藤君が倒れた…………熱を出して…………

でも、内心嬉しかったの。

だって、工藤君の家に行けるのよ？？

ここが工藤君のお家。結構大きい。

ピンポーン！

「はー?」

女人の声。お母さんかな?お姉さんかな?妹さんかな?

「蘭ちゃん。」

「佐藤刑事! ? 新! ! ?」

「ら、蘭・・・・・

「新! ! .しつかりしてよ、もひー!」

お姉さんかな?

「とつあえず、ソファに寝かせてください。あ、佐藤刑事達。『飯
食べました?』

「ううん。まだ、これからなの~」

「じゃ、食べてくださいよ。新! はびひせおかゆ。一人で食べるこ
は多いですか?」

「じや、お皿葉に甘えよつかな?」

「どうぞ、上がってください。」

「へ～いい～オイね～。蘭ちゃん。今日はハンバーグ?」

「はい。新一は昔からハンバーグが好きなもんで。」

やつぱりお姉さんか。

「蘭ちゃん達結婚式はこいつね～。」

「まだ決まってませんが、高校を卒業したら、じっくりれて、
プロポーズされちゃって。」

「あ～～やけるわね～～」

ん? 工藤君が確か、高3よね? 双子なんかじゃ~。

「工藤君とは同じ年なんですか?」

「ええ、やつよ。えっと・・・・。」

「高杉聖歌です。聖歌って呼んでくれご。」

「聖歌さんには、私達の署の署長の娘さんなの。」

「やうなんだ・・・よひしへねー聖歌ちゃん。私のことほ蘭でかまわないから。」

わたしは正直驚いた。だって、みんな、署長の娘ってだけで、呼ぶ名前はいつも、

『聖歌さん』・『高杉さん』の

どれがだったから。

1 恋！恋！恋！（後書き）

「工藤君を奪つてやるわよ——」

「燃えてますね・・・」

聖歌
「当たり前よ！久しぶりの恋だもの。
大事にあつためておきたいじゃない？」

「あー、一応女の子なんですね。」

聖歌　一應のりなする・・・」

桜桃 一え？あ、いやあ……」

「蘭さん。婚約おめでとうございます。」

「ありがとうございます。聖歌ちゃん。」

「もう少しひ、これ、くれたのよ。指輪。」

それはとても高価で、せりあがしてくるダイアモンド。

「ら、ーん。」

「新ーー!? 大丈夫? おかゆ作ったけど、食べられそう。」

「う、ーーん。」

工藤君。お姉さんのこと呼び捨て。でも、そういう家庭あるもんね。

「はい、食べてね。」

「食わせてくれ、ねーのー?」

(! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ? ! ?)

お姉さんにたべさせてもらひ・・・?今は甘えん坊なのかな?前聞
いたとき、

両親は海外つて言つてたし、寂しいのかも。

「はいはい。そのかわりおとなしく寝てなさいよ?」ちよつと待つて
て。「

T R R R R R R

「あつお父さん? 今日ね新一が熱出しちやつて。うんうん。それで、夕飯は作れないから、ポアロで食べててくれる? 梓さんにようし

「へつて言つておいてね。」

「新一。今日は私泊まるから。」

でも、疑いが晴れると思うこの会話を聞いていたのは佐藤と高木、新一の三人だけだった。

つとそのころ聖歌はトイレに行っていたのである。

「じゃ、蘭ちゃん。私たちは引き上げるわね。」

「ともおこしかったよ。工藤君も幸せだね。」

高木刑事の言葉に蘭は赤くなつた。

「あつ聖歌さん。もう、帰りますよ。」

「はい。蘭さん。ありがとうございました。」「どうもありがとうございました。」

「気に入ってくれてよかったです。」

そうして三人は帰つていつた。

「ね～パパ～私、工藤君のこと気に入っちゃつた。縁談持ち掛けで
くれない?おねがいよお～。」

「ええ、かわいい聖歌ちゃんのためにパパがんばりますー。」

つとこいつ金持ち親子の会話の風景・・・・・・

「工藤君。うみうみ娘ことひるいだ、話をしたいんだが。」

風邪はなおり、事件で呼び出された新一は事件を解決し、帰ることになった。

「はー。なんでしょうか。」

「わじの娘をびいきうへ。」

「？ 普通にかわいいと思こますナビ。」

「じやあ、妻に、嫁こしてもらえないか？」

「え？」

「いや、娘が君をえらく気に入つていてね、君ならわしも安心で。」

「…………すみません署長。ぼく、高校卒業したら結婚するんです。」

「

「え？？」

「すみません。長いこと待つてくれた彼女がいるんです。

僕が高2のとき姿を消しましたよね？ そのとき、すごい大きな事件があつて、

訳あつて皆の前に出られなかつたんです。でも、事件が片付いてようやく戻つてこられました。彼女が僕を信じ、僕が彼女を信じ。彼女が信じてくれていたからこそ、今の僕がいるんです。彼女とは幼馴染といつ

関係から始まりました。そのせいが、本当の気持ちをいつつのが照れくさくて、
なかなか素直になれなくて、でも、事件が出て姿を消して離れていたら
どんだけ彼女が大事か、どれだけ彼女を愛していたのかがわかつて。

事件が片付いた次の日、彼女に付き合つてくれつて言つたんです。でも、また離れるかもしない、それはいやだと思い、一年と2ヶ月ちょっと

付き合っている今、高校を卒業したら結婚しようプロポーズし

たんですね。」

話し終えると署長は「ああ、すまなかつたね。」ツといつていなくなつた。正直、話を聞いていると娘が叶わないことを一番理解したのはこの人かもしれない。署長はあまりにも娘がかわいそうで、みじめすぎて、「工藤君は今はその気はないと言われたよ。」つと自宅に帰つてから聖歌に言つた。

3 次々来る彼女たち。

場所。公園。

縁談・・・断られちゃった。女の子に興味がないのかな?

結構シヨツク。普通の男だつたら喜んで引き受けてくれるのに。

あんな綺麗なお姉さんがいたら私に振り向かないのもわかるけど・・・でもね。

もちろん蘭のことである。今日はいつ婚約してもいいよ!『新一さん』って呼ぶんだ!がんばろう

「聖歌さん。どうかしましたか?」

ドキッ

「へ、新一さん。びっくりしたわ。」

新一は新一さんといつも葉に動搖せず、

「「めん」「めん。それより、結婚式の招待状見た? きてくれると嬉しい。聖歌さんこなはお世話になつて るし。」

蘭さんの結婚式ね。く、新一さんと一緒に繕なうに行へー!

「ええ、私も楽しみ。」

「あれー? 新一君?」

「園子ーーー。」

「あり? 聖歌さんじやない?」

「園子さん。」

「知り合いか?」

「うふ。うちのパーティで招待したのよ。」

親しそう。もしかしてべべ・・・ううと新一さんびつても呼び

ぐこ・・・

恋人かな？私は思い切って

「園子さんと新一さんって恋人同士なんですか？」

「 」「 」

「あははははつ 聖歌さん。私たちはただの友達よ。確かにいじるにはもつてこい！」

でも、悪いけどタイ プじゃないのよねー。」

「俺も、園子のタイプ似合わせようなんでおもわねーし、それに園子には京極さんがいるだろ？」

「うん。あつそうだ。今日はそのうわさの彼が帰ってくるのよ。いつしちゃいられない。行ってくるわね。」

「ああ、気をつけろよー。」

そつか、彼女じゃないんだ。安心。

「あれ？工藤君やないの。」

「和葉ちゃん…？」とは、あにつも・・・・・

「ひこ来てますよ。」

もしかして、今度…？…

「それよつ工藤君ええの？蘭ちゃんほつとこい。」

「ああ、あと三十分はあるからな。」

「ええーー藤井一郎はおひたんかー。」

「服装…………おおえ、和葉ちゃんおこでビーチへ行ったんだよ。」

「アリサーーんなか弱い女おこで…………」

「お前のビーチがか弱いんやねん。お前はか弱かつたら世界中の女歩けないへりこの重病やー。」

「ビーチの意味やねんやれーー。」

「そのままの意味や。怪力女ー。」

「そんなこといったら、蘭ひやただつてKIKIやつてはぬよー。」

「いいんや、ねーちゃんには工藤があるさかい。おまえには誰もおらへん

俺がおらへんかつたら、お前を相手する男がないやろ。だから、ずっと俺のそばにおれよ。」

「平次・・・・・」

遠まわしに告白しなかつた！？』の人。

「服部、お前告白したこと自覚してるのか？」

「は？なんで俺がこんな怪力女に告白せなあかんねん！事実を言つたまぢや。」

「平次・・？ 殺氣！」

この人。すつごい鈍感なのね。

「じゃ、俺らはもう少し観光を楽しむさかい。」

「工藤君。いろんなあほこつき合わせて悪かったね。今度ついにきてや！」

「こんなお店紹介するとかい！」

「ちょ一まで、その役目は俺や！おまえはねーちやんの相手でもしてればいいんや。」

「なんやそれ！」

などなど、言い合いしながら一人の姿は見えなくなつた。

結局一人の関係は親友の恋人つてわけね

「久しぶりね、工藤君。」

「富野？なんでそんな姿なんだよ。」

うわーすごく綺麗な人。もう、騙されないわよーこの人もただの友達。（そうであってほしい。）

「理由は後で言つわ。工藤君、前言つてたあれ、時間までまだあるんでしょう？ちょっと見てこない？」

「ああ、そうするか。聖歌さん。じゃ、また今度。」

そういうていなくなつた。今度こそ絶対彼女だ。私諦めるしかないのかなー？

3 次々来る彼女たち。（後書き）

結局いろんな人がきました。

まだ、蘭が恋人・・・お姉さんだと思つていろいろみたいですね。

結婚式にくる聖歌の様子を考えると

面白いな～って思っちゃいます。 結局、

「～蘭ちゃんだって空手やってますよ？」

「いいんや、ねーちゃんには藤谷があるわかい。」

ひとつひとつ余話は一々つも聞いていない聖歌でした。

4 諦めない気持ち

あの後、新一さんは毎日したんだね。・・・。

「パパ。結婚式の招待状がどうこてるでしょ？」

「え？ 知っているのか？」

「うん。新一さんのお姉さんの結婚式でしょ？ 出席するから。」

「え？ お姉さん？」

(工藤君にお姉さん？ 確か一人っ子だったよな？ そもそも、工藤君の結婚式。工藤君は お 姉さんと結婚するのか？ いや、いいに、わやんと『工藤新一』『毛利 蘭』って書いてあるし。・・・・)

「どうかしたの？ パパ。」

「いや・・・・・」

「新一さん！」

「聖歌さん。」

「今日も事件？」

「ああ、その帰りだよ。」

「彼女、元気ですか？」

「え？ 彼女？」

「ほら、昨日来た女人。たしか、み、み・・・・・」

「富野？」

「や、そうー富野さん。」

「ちがうよ、あいつは、ううん、探偵の相棒かな。女友達で唯一信頼できる奴。かな？」

女友達の方を強調した。

「そうだったの。なんだ。「めんなさいね。」

「いいえ、じゃ、お先に。」

「ええな。」

~~~~~  
帰り際~~~~~

「あつ工藤君。」

「なんですか、署長。」

「えっとね、娘は、君が彼女もちゃだって知ってるのかね？」

「いえ、知らないみたいです。さつき、僕の彼女を全然違う人と勘違いしてましたから。」

「そりか、じゃ、結婚式でおどろかせるとするかな。」

「あんまり悪趣味な」とすると、可憐そりですよ。」

「いいんだ、いいんだ。（笑）」

（このオヤジ、自分の娘で遊んでやがる。まるで園子の男バージョンだなこいつや。）

「では、僕は学校の帰りなんで。」

「ああ、悪かったね、引き止めて。」

「いえ。」

そつか、工藤君の彼女じやなかつたんだ。私も少し希望もつてもいいのかな？

縁談断られたからつて、口々で引き下がれないわ！

後3日で蘭さんの結婚式。

さつせと結婚してほしいものだわ。

工藤君の姉といつても、女。邪魔なのよね。

私がだいつきらいなタイプ。

工藤君のお姉さんだし、将来はお義姉さんになるわけで。

いまのうちに愛想をふりましておじつという魂胆。

3日間なんてあつといつ間。聖歌がはいのせでもつとも苦しい体験を  
迎えようとしていた。

## 5 迎える茜しみ(?) 結婚式

もう、あつと/or間に3口が過ぎ、今日は新一の結婚式。

「蘭さんの姿。さわかし綺麗でしょうな。園子さん。」

「そうね、大体はだんなの力だろうけど。」

「だんなさんってどんな人なんですか?」

「どんな人も何も、相手は新しい・・」

「

園子さんの話の途中で音楽が流れた。

音楽が流れ、お父さんに手を引かれながら歩いてきた蘭さん。

新郎は立っているんだけど、まぶしくて見えない。

「あなたは蘭さんを妻とし神の御定めに従い  
聖き婚姻を結んで共にその生涯を送りますか  
あなたはこの女性を愛し、慰め、敬い、支え  
両人の命のある限り一切、他に心を移わず  
この女性の夫として身を保ちますか」

「いたしません。俺は、生涯と言わば、  
死んでも愛しぬきます。」

かつこいー

つて、ちょっとまって？

なんか、新一さんの声に似てなかつた？

ま、まさかねえー？

「蘭さんあなたは新一さんを夫として  
神の御定めに従い聖き婚姻を結んで  
共にその生涯を送りますか  
あなたはこの男性を愛し、慰め、敬い、支え  
両人の命のある限り一切、他に心を移さず  
この男性の妻として身を保ちますか」

「はい、いたします。」

・ · · · ·

あのあ～いま、

『新一さんを夫とし。』

つていわなかつた？

もしかして、二人は、姉弟じゃなくて、

赤の他人！？

あつという間に結婚式は終わった。

「パパ、どういう意味？」

「え、？」

「私がせつめいするわ。来なさい。」

言つたのは、あの宮野さん。

「工藤君と蘭さんは正真正銘、他人。元は、幼馴染だつたのよ。あの二人。でも、ある日突然彼は姿を消した。その時、出会つたのよ。私達は。」

志保は、あのことを全てはなした。

(コナン、哀なったことはのぞいて。一人の関係をはなした。)

「最初から、あなたの入り隙間は一ミリもないわ。だって、もうあの二人は夫婦なんですもの。」

「でも、振り向かすことくらい…。」

「無理ね。いったでしょ？ 幼馴染だつて。小さい頃から二人は一緒なの。」

ココまで気付き上げた二人の関係。この18年間。あなたに崩すことなんて出来ないわ。

一欠けらもね。それに、彼の心はもう、蘭の色でそまつてるから。そして、彼女の心も新一の色で染まっているの。だから、もし、工藤君が、蘭さんに振られても、生涯愛するのは彼女だけ、たぶん。一生独身でいるわね。それに、彼から振るなんてありえない。

彼女もね。二人は、信じあってるの。いえ、それ以上の絆で結ばれてているのよ。」

「ねえ、富野さん。あなたは悔しくないの？ あなただけ新一さんがすきなんでしょう？」

「冗談はそこまで。わかったなら、せつねむきいめることね。」

「私、工藤君の彼女があなだと思つたの。  
あなただったらあきらめようつて思つてた。所詮、その程度の恋  
だつたつてことかしい。」

「さあね、でも、蘭さんなら彼を信じていたでしょうね。  
例え自分に見込みが無かつたとしても。」

「ええ。今ならわかる氣がするわ。ありがとうございます。宮野さん。  
あなたのおかげで私、目がさめました。工藤君を、諦めるんじや  
ない。  
蘭さんとの関係を祝福してるんです。私は今、快くおめでとうとい  
言えます。」

「そう。それならよかつた。」

「はい。」

「私、今なら言える。」

「工藤君。蘭さん、お結婚おめでとうございます。」



5 迎える節(?) 結婚式(後書き)

そ・の・あ・じ。 (前書き)

そ・の・ぬ・ぶ。

「あ、涼ちゃん。」

「あら、蘭さん。」

「どうしたの？控え室にあたとせせ、涼ちゃんの姿だったの？」

「ええ。ちよつとね。あなた方に来てると毎つかい。  
じゃあ、ひよつと。」

「うそー。」

「園子？」

「つたく、主役のあんたがどこにいったかって大騒ぎよ？」

「うそつ！」

「ほら、早く！」

「で、でも・・・今、袁ちゃんが・・・」

「私がいるから大丈夫。蘭は行つて！」

「う、うん・・・」

ガチャ・・・

「園子ちゃん。」

「あ、きたきた。」

「蘭ちゃん。」

「戻ったわ。主役だもの。」

「ナウ・・・」

「ねえ、哀ちゃん。覚えてる?組織のあと、新一君が重傷で・・・」

「ええ。覚えてるわ。」

「私ね、あのとき言った言葉。すつゝへあとで後悔したのよ。」

「ーー?」

「あやまる必要はないわ。本当のことだし、私には、あそここいる資格。なかつたもの。」

「そんことはない。だって、本当に私が悪かつたんだもの。あやまるのが義理でしょ?それに、もう、私なんかってマイナス思考で考えるのはやめよ?」

「蘭からも、言われたと思つけど、哀ちゃんは

私の・・・私たちの大切な友達なんだから。」

「園子さん・・・」

「哀ちゃん、これからもよろしくね?」

「ええ。」

新たな友情が

ここで芽生えた。



そ・の・あ・じ。 (後書き)

私の中での哀ちゃんは、  
小学生っぽいことで、でも、  
志保ちゃんにも戻してみたくて・・・  
で、書いちゃいました^ ^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4885m/>

---

苦い思い出。いや、苦痛な思い出!?

2010年10月11日23時20分発行